

【論文】

変化の中の集団区分

——ソロモン諸島マライタ島北部の「海の民／山の民」
(アシ／トロ) 関係をめぐって——

里見龍樹 (早稲田大学人間科学学術院)

1. はじめに

本稿では、ソロモン諸島マライタ島北部に見られる「海の民／山の民」という集団区分の歴史的・社会的現状について考察する。マライタ島北東部で独自の海上居住を営んできた言語・民族集団ラウ (Lau) は、現地では多くの場合「海の民 (アシ、Asi)」と呼ばれる¹。現在、一定数のラウは海上居住を放棄しているが、「アシ」としての集団的同一性、および近隣の「山の民 (トロ、Tolo)」との間の集団区分は、人々の日常的意識においてあくまで維持されている。他方で現在、人口増による土地不足の不安が高まる中、ラウの間には、祖先の移住伝承を根拠に、自らの「故地」をマライタ島の内陸部 (トロ、*tolo*) に見出そうとする動きが強まっている。このような中、マライタ島北部の「アシ／トロ」関係には、両者の伝統的な優劣関係の逆転など、根本的な変化が生じつつある。「アシ／トロ」関係のそうした現状を分析することで、本稿では、この集団区分は、現在に至る歴史的・社会的変化に関わる人々の自己認識と結びつくことで維持・再生産されているという理解を提示する。

2. マライタ島北部の「ラウ」とその海上居住

マライタ島に住む約 13.5 万の人々 (Statistics Office 2011: 6-7) は、現在の人類学・言語学の文献やソロモン諸島国の政府文書において、通常、約 10 の言語・民族集団に区分される。同島で用いられている主な言語・方言として、いずれもオーस्टロネシア (マラヨ・ポリネシア) 系に属する、ラウ、トアバイタ (To'abaita)、バエレレア (Baelelea)、バエグ (Baegu)、ファタレカ (Fataleka)、クワラアエ (Kwara'ae)、ランガランガ (Langalanga)、クワイオ (Kwaio)、アレアレ ('Are'are)、サア (Sa'a) が知られている。これらの言語の名称は、現地において、それを話す人々に対する集合的な呼称としても用いられる。

このような呼称に従えば、筆者が調査対象としてきた、マライタ島北東部の海上

¹ ラウ／アシについてのより包括的な民族誌としては、里見 (2017) を参照されたい。

および海岸部に住む人々は、「ラウ」と呼ばれることになる²。ラウは従来の民族誌的文献において、独自の海上居住を営み、活発な漁撈活動と市場交易に従事する人々として紹介されてきた (e.g. 秋道 1976; Ivens 1978[1930]; Maranda and Köngäs Maranda 1970)。マライタ島北東部には、海岸線に沿って南北約 30 キロに渡り、今日ラウ・ラグーン (Lau Lagoon) と呼ばれるサンゴ礁が発達している。ラウの人々は、このサンゴ礁内の浅い海に岩を積み上げて島を築き、その上に住居を建てて居住することを今日まで続けてきた。現在でも同地域には、これまでの文献で「人工島 (artificial islands)」と呼ばれてきたそうした島々が 90 個以上も点在している。それらは数百人から数人と大小さまざまな居住人口をもち、一部の島が放棄され無人化している一方で、現在でも新たな島の建設や既存の島の拡張が行われている。

筆者が主な調査地としてきたのは、ラウの居住地域の北端に近い、マライタ島本島の海岸部に位置する集落 T 村と、その沖合に広がる人工島群である (図 1)。T 村は、1935 年以來カトリック教会が置かれ、現在約 40 世帯 260 人が居住する相対的に大規模な集落である。T 村のすぐ内陸側にはバエレレアの人々が居住する小集落が点在しており、同村はまさしくラウとバエレレアの言語・民族境界沿いに位

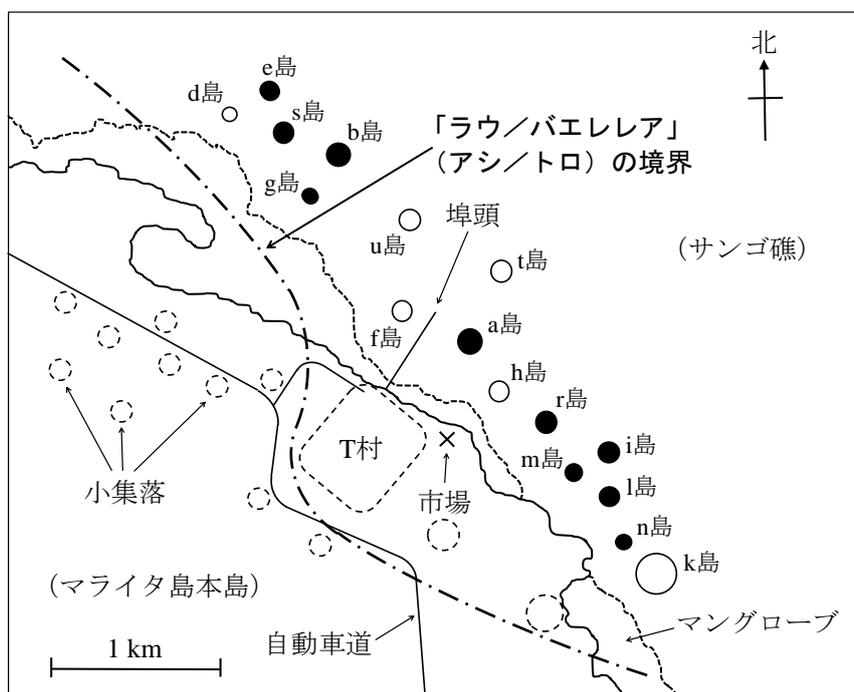


図 1 T 村と沖合人工島群 (●は有人、○は無人の島)

² 1999 年の国勢調査において、「ラウ語」を第一言語とする人口は 16,900 人あまりとされている (Statistics Office c2001: 170)。

置している。他方、T村の沖合には、調査時点で16個の中～小規模の人工島が点在しており、うち有人の10個には合計約190人が居住し、残りの6個は無人となっている。なお、20世紀を通じて進展したキリスト教受容の結果、現在のマライタ島に住む人々のほとんどはキリスト教徒となっており、調査地の場合、人々はほぼ例外なくT村のカトリック教会の信徒である。

以下では便宜上、T村と沖合人工島群を一括して「T地域」と呼ぶが、そうした括りは現地の人々の認識にも合致する。人々によれば、現在見られるようなT村は、1970年代後半から80年代にかけ、数度に渡るサイクロン被害をきっかけとして、一部の人工島の人々が本島海岸部に移住したことにより形成された。こうした経緯のため、現在の人工島居住者とT村居住者は、親族関係においても日常生活においてもごく密接な関係にある。他方で、T地域の人々と、内陸側に住むバエレレアの人々の間には、地理的な近接性や、後述する市場などでの日常的な接触にもかかわらず、以下で問題にするような明確な集団区分が意識されている。たとえば言語に関して、T村の人々と沖合人工島の人々の間に差異が認識されていないのに対し、内陸側の人々は、T地域の人々と相互に理解可能ではあるが、語彙や抑揚において明確に異なるバエレレア語を話しているとされる。

3. 「海の民／山の民」(アシ／トロ) という集団区分

マライタ島北部において特徴的なのは、上で見た「ラウ、トアバイタ、バエレレア、バエグ……」という言語・民族範疇と並び、「海の民／山の民」(アシ／トロ) という二項的な集団区分が用いられている点である。これまでの民族誌的文献(e.g. Hogbin 1970[1939]; Ivens 1978[1930]; Ross 1978) で指摘されているように、マライタ島北部の人々は、居住地と生業パターンの差異に基づき、自他を「海の民」(アシ) と「山の民」(トロ) に区別してきた。「アシ (*asi*)」と「トロ (*tolo*)」は、本来それぞれ「海」と「山地」を意味する空間範疇だが、現在では、「われわれアシ (*gemelu Asi*)」、「トロの人たち (*Tolo gi*)」というように集団範疇としても用いられる³。先の言語区分との対応で言えば、トアバイタ、バエレレア、バエグ、ファタレカが基本的に「トロ」に分類される——人々が実際に、内陸部と海岸部のいずれに居住しているかを問わず——のに対し、ラウは総体として「アシ」とみなされる。

T地域での観察によれば、従来の文献に従えば「ラウ」に分類される同地域の

³ 「アシ／トロ」は、もともと「トー・イ・アシ (*Too 'i asi*, 海の人々) / トー・イ・トロ (*Too 'i tolo*, 山の人々)」の省略形だが、後者は古語的な表現であり、現在ではほとんど用いられない。

人々は、日常的なやり取りにおいて、自称としても他称としても、「アシ」と呼ばれることが多い。しかし、同地域において、「ラウ」やそれと同系列の諸範疇がまったく用いられないわけではない。調査地での知見から、「ラウ」と「アシ」という2種類の民族・集団範疇の使い分けを、おおよそ次のように整理することができる。すなわち、マライタ島全体が文脈として想定され、そこに並存する一連の言語・民族集団の一つとして自分たちを位置付ける場合、「トアバイタ、バエレレア、バエグ……」といった範疇と並列されるべきものとして「ラウ」が用いられる。これに対し、日常生活において主として問題となる、マライタ島北部という限定された地域的文脈においては、人々は「アシ」と「トロ」に二分されたものとしてイメージされ、「アシ」範疇が用いられるのである。

現在のラウ語地域において、「アシ／トロ」という区分は、空間範疇および集団範疇として、たとえば次のようにごく日常的に用いられる。

事例1 T地域における農耕の現状について調べていた筆者は、2009年8月のある日の夕方、昼間の聞き取りで違いがわからなかった「ウガ (*unga*)」と「フォデ (*fode*)」という2つの農耕関連語彙について、T村の隣家の女性(30代、父はもと人工島居住者)に尋ねた。これに対し、彼女は次のように答えた。『ウガ』と『フォデ』は同じだよ。ごみ (*tafu*) [休耕地を再び耕地にする際に刈り取った草木]を集めて畑を片付けることだ。トロの人たちは『ウガ』と言って、われわれアシは『フォデ』と言うんだよ。』

ここでは、T地域に住む「われわれ」が「アシ」であり、その言語が、「トロの言葉 (*baelaa Tolo*)」と対比される「アシの言葉 (*baelaa Asi*)」であることが、事実上自明視されている。なお先述の通り、現在のT村は、1970~80年代に人工島群からの移住によって形成されたものであり、この過程で多くの人々が、文字通り「海(アシ)」に住むことを放棄した。上のような語りは、本島へのこの移住が、人々における「われわれはアシである」という自明性の意識を、直接に揺るがしてはいないことを示している。

ラウ語地域において、「アシ／トロ」区分はまた、言語上の差異としてのみならず、現地で「カスタム (*kastom*)」と呼ばれる伝統的慣習における差異としても語られる⁴。

⁴ 筆者は、2008年から2014年にかけての約17か月に渡る調査の最初の6ヵ月間は主にピジン語 (*Pijin*) を、その後はラウ語を用いた。このため、本稿で挙げる事例の一部は、以下の例のようにピジン語による語りとなっている。なお本稿では、ピジン語

事例2 2008年12月末、T村に住む若い女性（父はもと人工島居住者）の婚礼が行われた。相手はトアバイタ語地域の男性で、新郎方の親族は、貝貨 (*malefo*) を中心とする婚資を持って同村に新婦を迎えに来た。会場で筆者を見かけた T村の女性（50代、もと人工島居住者）が次のように説明した。「今、あの家〔花嫁の実家〕の中で花嫁がターフリアエ (*taafuli'ae*) 〔貝貨の一種で、身体装飾としても用いられる〕を身に着けているところだよ。でも、あのように入方がターフリアエを持ってきて花嫁に身に着けさせるというのは、ブッシュ (*bus*) のカスタムだ。私たちソルワタ (*solwata*) はそうはしない。〔貝貨などの装飾品は〕花嫁方が用意する。」

このようにマライタ島北部において、「アシ／トロ」あるいは「ソルワタ／ブッシュ」はしばしば、それぞれが古典的な人類学における「民族」に相当する、固有の文化的特徴の担い手であるものとして語られる。これに関連して、同地域における「アシ／トロ」区分の一つの特徴は、それぞれの集団の性格に関して伝統的なステレオタイプが維持されてきたことにある。すなわち、日常的に海上を自由に移動し、また西洋世界との接触が始まった19世紀末以降には外来の事物をいち早く取り込んだ「アシ」の人々が、一般に社交的で開放的、また進歩的な性格をもつとされるのに対し、長距離移動の困難な内陸部でもっぱら自給的な生活を営む「トロ」の人々は、寡黙で閉鎖的な、そして相対的に「遅れた」人々であるとみなされてきた (Ivens 1978[1930]: 32-35; Ross 1978: 112-113)。ここにはしかも、双方が自らの優越を主張するというのではなく、「アシ」は「トロ」を軽蔑し、「トロ」は「アシ」の優位を少なくとも一面で認めるという、一方的な優劣関係が認められる。「アシ」の側におけるそうした意識は、たとえば次のように証言される。

事例3 2009年5月、首都ホニアラに住む人工島出身の男性（40代）は、筆者との会話の中で、1970年代前半のT地域の市場について次のように回想した。「われわれが子どもの頃、市場にやってくるトロの女の子たちは皆、上半身裸だった。われわれは、『自分たちアシの方が進んでいる』と思っていたので、そうしたトロの女の子たちを見て笑っていたものだ。」

現在のT地域でも、「トロ」は一面で、漁業など相対的に豊富な現金収入機会を

表現には下線を付して示すこととする。

もつ「アシ」の人々との対比において、「貧しく、遅れた生活を送る人々」というイメージを付与されている。ただし、そのような優劣関係には現在根本的な変化が生じつつあり、これについては後述する。

4. 市場と「アシ／トロ」関係

マライタ島北部の人々の間で「アシ／トロ」関係が問題とされる主要な文脈の一つに、この地域に点在する「市場 (*uusia*)」がある。「アシ」と「トロ」の関わり合いの場としての市場は、同地域に関する民族誌的文献においてもたびたび注目されてきた (e.g. Hogbin 1970[1939]; Ivens 1978[1930]; Ross 1978)。マライタ島北部の市場は、19 世紀末における西洋世界との接触以前から行われていたものと推定されるが (Ross 1978: 131)、現在でも、ラウ・ラグーン沿いの多くの場所で、通常週 2 回開かれる定期市のかたちで行われている。伝統的には、市場における取引は女性のみによって行われる。男性は市場の内部に立ち入ってはならないとされ、現在でも一部の市場ではこうした規制が維持されている。また、かつての取引は魚とイモ類の物々交換のかたちで行われていたが、現在では現金を用いた売り買いが中心になっている。

現在の T 地域において中心的な市場は、T 村の南東側を流れる川の河口近くで、毎週火曜と土曜の午後に開かれる (図 1 参照)。とくに土曜日の市場は、T 村、沖合人工島群や近隣の「トロ」の諸集落から数百人の人が集まる大規模なものとなる。T 村の市場の場合、市場の端で「トロ」の男性たちによって売られるビンロウジュの実 (*'egeru*) を除き、品物の売り手は女性のみだが、男性が市場の中を歩いたり、品物を買ったりすることは認められている。売り物の魚や貝類は、人工島群や T 村の一部の世帯によってもたらされる。他方、サツマイモ、キャッサバをはじめとする主食のイモ類や、バナナやココヤシなどの農作物は、ほとんどの場合、近隣の「トロ」の集落の女性たちによって供給される。

ここで注目すべきは、「アシの人たちが魚を、トロの人たちがイモを持ってきて、それらをやり取りする」という定型的な説明が示すように、マライタ島北部の人々において市場が、「アシ」と「トロ」が出会い、やり取りする場所としてもっぱら概念化されているという点である。たとえば人工島在住の男性 (40 代) はある時、T 村北方のある市場について、そこでは「アシの女たちが魚を持って歩き回り、トロの女たちはイモを並べて座っているのだ」と説明した (2011 年 8 月)。同じように、先の事例 3 でも、1970 年代の T 地域における市場が「アシ／トロ」の接触の場として語られていた。特徴的なことに、市場に関するこのような語りにおいて、「ラウ／バエレレア」という範疇が用いられることはない。

現地の人々によるこれらの語りには、「アシ」と「トロ」がそれぞれ市場に魚とイモ類を持ち寄り交換するという、2つの集団の間の相補的な関係のイメージを読み取ることができる。そのようなイメージは、マライタ島北部の市場交易と集団間関係に関する従来の人類学的分析をも強く規定しており、たとえばロスは、同地域の市場交易を、「経済的専門分化 (economic specialization)」を通じた「社会文化的統合 (sociocultural integration)」のシステムとして機能主義的に分析している (Ross 1978)。このような機能主義的説明は現地の人々の語りともある程度親和的だが、筆者の見るところ、そのような説明のみでは、今日における「アシ／トロ」関係の動態をとらえることはできない。以下では、そのような理解には収まらない「アシ／トロ」区分の現代的意味を明らかにすることを試みたい。

5. 「アシ」になること——集団的同一性と歴史的变化

まず検討したいのは、マライタ島北部の人々の認識において、現在の集団区分の歴史的背景をなしている、もともと「トロ」であった人々が「アシ」になったという変化・移行についてである。注目すべきことに、今日通用している「アシ／トロ」という二項的な図式の反面で、マライタ島北部の人々は、現在「アシ」と呼ばれる人々ももともとは「トロ」であったという認識を共有している (里見 2017: 第2章)。そのような認識は、「アイ・ニ・マエ (*'ai ni mae*)」と呼ばれる、個別の氏族の父系的祖先の移住についての一群の伝承に基づいている。それらの伝承において、「アシ」の人々の祖先は、マライタ島の内陸山地部、すなわち「トロ」の各地にもともと居住していたのだが、多くの世代に渡り、さまざまな経緯で移住を繰り返した末、マライタ島北東沖で人工島を建設しそこに居住するに至った、と語られているのである。

このような伝承は、個別の氏族の祖先における「トロ」から「アシ」への集団的同一性の移行を語るとともに、伝承群の総体としては、人工島居住の拡大を通じて、「アシ」という集団それ自体が形成されてきた過程を物語るものとなっている。これらの伝承において特徴的なのは、現在「アシ」に分類される諸氏族が、「アシ」としての共通の出自といったものを持たず、地理的にはマライタ島内のさまざまな地域に由来するとされている点である。たとえば、T村沖で6つの人工島を創設し、現在でも同地域の人口の一定部分を占めるG氏族は、伝承において、マライタ島中部のクワラアエ語地域に由来し、長期の移住を経てT村沖に定着するに至ったとされる。このように、一群の伝承において「アシ」という集団は、反復的な移住と独自の居住様式や言語の共有を通じて、漸進的に形成されてきたものとされているのである。

「アシ」の形成過程に関する上のような認識は、「アシ」という集団的同一性を、内陸部から海岸部あるいは海上への空間的移動、およびそれにともなう慣習や生活様式の変化という契機と本質的に関連付けるものである。メラネシアでは、多くの地域において、植民地統治やキリスト教受容の過程で、内陸部から海岸部への移住による居住パターンの再編が生じたことが知られている。その結果これらの地域では、しばしば「カスタム／スクール (skul)」という対概念によって表現される、「植民地化・キリスト教受容以前の伝統的生活様式／現代の非伝統的・キリスト教的生活様式」という二分法が、「内陸部／海岸部」という居住空間の対比に重ね合わされる傾向がある。マライタ島北部に特徴的なのは、「スクール／カスタム」のそうした対比が、「アシ／トロ」という集団区分と不可分に結び付いている点である（里見 2017: 第 5 章）。「アシ」範疇を直接に用いてはいないものの、次の語りはそうした関連をよく示す例と思われる。

事例 4 2009 年 5 月のある日、T 村に住む女性（50 代、夫は人工島出身者）が、自身の父がどのような事情で「トロ」から同村に「下りてきた (*sifo*)」かを筆者に語ってくれた。この女性やその弟は現在、T 村に住み、他の人々と同じ言語を用いており、「アシ」帰属を実質的に獲得しているが、他方で、彼らの父が「トロ」からの移住者であることはよく知られている。「私の父さんはトロから来たんだよ。父さんがまだ子どもだった頃、父さんの母親が亡くなり、父さんとその父親、それから幼い弟の 3 人だけが残された。祖父たちは、『母親が残されたならまだしも、父親だけになってしまっは子どもは育てられない』と考えた。ちょうどその頃、このあたり [現在の T 村] に宣教師たちがやってきて教会を建てようとしていて、トロの人たちもそのことを聞いていた。よく知らないけれども、白人は食べ物やタバコ、衣服などをくれるらしかった。それで祖父たちは、『自分で育てられないなら、この子は白人たちに引き渡して、育ててもらおう』と考えた。それで父さんはここまで連れてこられて、タバコと引き替えに宣教師たちに渡された。そういうわけで、父さんはこの宣教師たちに育てられることになったんだ。」

この語りにおいては、「トロ」の視点から見て、現在 T 村のある海岸部（アシ）がキリスト教（スクール）と密接に結び付けられることで、この女性の家族における「トロ」からの移住とキリスト教受容、さらには「アシ」帰属の獲得という一連の変化が、事実上一つの事態とみなされている。ここには、「アシ」という集団的同一性それ自体を、キリスト教受容や移住といった歴史的変化の産物とみなす見

方を読み取ることができる。このように、集団範疇としての「アシ」は、マライタ島北部において、西洋世界との接触の前後における歴史的・社会的変化との本質的な関連を含意するものとなっているのである。

6. 「アシ／トロ」関係の現代的変容

「アシ」集団の形成に関わる、先に述べたような移住伝承は、現在のマライタ島北部における諸変化の中で新たな意義を帯びつつあり、それにより「アシ／トロ」区分の意味も根本的に変化しようとしている。別のところで論じたように（里見 2017: 第 1 章）、マライタ島、中でも人口密度の高いその北部では現在、人口の増加と海岸部への集中により、自給的農耕のための土地が不足しつつあるという不安が広く共有されている。このような不安は、「アシ」の人々にとって特別な切迫性をもつ。というのも「アシ」は、他地域からの長期に渡る移住を経て現在の場所に定着した人々として、一般に現住地やその周辺に土地を所有しない。このため「アシ」の間では、土地不足の結果として、近い将来、現在居住し耕作している他の人々の所有地から転出することを余儀なくされるかもしれない、という意識が広まっている。

こうした不安はまた、2000 年前後のソロモン諸島国における、いわゆる「民族紛争 (Ethnic Tension)」の体験によってさらに強められている。この紛争の過程では、首都ホニアラやその周辺に移住したマライタ島の人々が、武装勢力によってしばしば暴力的な仕方ですべて現住地から追い出された。このような出来事が、マライタ島、とくに「アシ」の人々に、自らが慣習的に所有しない土地に住むことの不安定性を強く印象付けたことは疑いない（宮内 2011: 第 7 章）。同紛争はまた、輸送・交通手段や都市市場を崩壊させることで、漁業を通じた「アシ」の現金収入を一時的に途絶させた。後に述べる、農耕に基づく自給的生活への再評価は、こうした体験からもおそらく影響を受けている。

次の語りは、土地不足への懸念や「民族紛争」の影響の下で、「アシ」の人々が置かれた状況をよく示している。

事例 5 2008 年 11 月のある朝、T 村の中学校の理科教師の男性（30 代）が、自身の父方の出身地であるフォウエダ島 (Fou'eda Is.) ——T 地域の南方約 6 キロに位置する、最古かつ最大の人工島の一つ——の現状について、次のように説明してくれた。「フォウエダには氏族が 3 つあって、それらが一緒になってレレ (Rere) [上位氏族の名] が出来上がっている。『レレ』というのは『一まとまりのココヤシの実』という意味で、いくつもの氏族が集まっているからそう呼ばれ

るんだ。でも今、人々は系譜をたどってももとの土地に戻ろうとしていて、レレはまたバラバラになりつつある。(筆者：なぜ人々はももとの土地に戻ろうとしているんですか?) 島[人工島]は住むためだけの場所であって、そこに畑を作ることはできないからだよ。今は人口が多いから、ずっと島に暮らしていると、そのうちに自分の土地を他の人たちに取られてしまうんじゃないかと、皆心配しているんだ。」

ここで語られているように、土地不足に対する不安の下、「アシ」の間には現在、先に見た移住伝承を逆向きにたどり、マライタ島の内陸部、すなわち「トロ」の各地にあるという自らの氏族の「故地 (*ae fera*)」を特定し、そこでの土地権を主張したり、内陸部に新たな生活拠点を築こうとしたりする動きが広く認められる。伝承に語られる「アシ」の人々の「トロ」出自は、現在そのように、居住地の確保をめぐる新たな関心の対象となりつつあるのである。

「アシ」の以上のような状況には、「われわれもももとはトロだった」という想起を通じて、自らの集団的同一性を潜在的に再定義する動き——言うなれば、再び「トロ」になろうとする動き——を見て取ることができる。そのような動きの中で、マライタ島北部における「アシ／トロ」区分の意味も、根本的な書き換えを被りつつある。すでに見たように、同地域には伝統的に、より豊かで進歩的であることを自認する「アシ」が、内陸部に住む「遅れた」人々としての「トロ」を見下すという関係が認められ、同様な見方は現在でも一面で維持されている。しかし他面において、海岸部での土地不足への不安や、「アシ」の漁業収入を支えてきた国内経済システムへの不信が強まりつつある現在、「トロ」は、自給的農耕に基づく伝統的な生活様式——現地の人々の表現では、「カスタムに従った生活 (*toolaa sulia kastom*)」——を相対的に維持している人々として、新たに積極的評価を受けつつある。逆に、「アシ」であることは、フォウエダ島の現状に関する上の語りも示唆するように、従来とは一転して否定的・消極的な意味付けを受けるようになっていくのである。

「アシ／トロ」関係のそのような再定義は、たとえば次のような語りに読み取ることができる。

事例 6 2009年1月、畑仕事に同行した筆者に対し、T村の男性(30代)は次のように語った。「ブッシュはこのあたり[T村周辺]より土地がいいから、ブッシュの人たちは今でもサツマイモじゃなくてタロイモ(*alo*)やエドゥ(*edu*) [長大に成長するクワズイモの一種]を植えて食べてる。だから、婚礼がある時

などには、われわれはブッシュまで行ってタロイモやエドゥを買ってこないといけないんだ。」

この語りの背景にあるのは、T村周辺において、耕地の相対的不足のために休耕期間が短縮され、そのため、連作に強いサツマイモやキャッサヴァしか栽培できなくなっている、という現状認識である。これに対し、人口密度が相対的に低い「トロ」では、人々は肥沃な土地でタロイモ、「エドゥ」など伝統的とされる作物を栽培し、豊かな食生活を送っているとみなされている。「アシ」におけるこのような認識には、キリスト教受容や海岸部への移住など歴史的变化の結果として貧相な食生活を送る自分たちと、豊かな「カスタムに従った生活」を送る「トロ」という対比的な評価が、明確に示されている。

7. 変化の中の「アシ／トロ」区分

先に指摘した通り、マライタ島北部において「アシ」という集団範疇は、西洋世界との接触以前から今日に至る歴史的・社会的変化と密接に結び付けられてきた。以上の検討が示唆するのはさらに、現在の同地域において、単に「アシ」のみならず、「アシ／トロ」という集団区分それ自体が、人々における変化の体験やその認識と深く関連しているという事情である。とくに、「アシ」の側における「アシ／トロ」区分に対する意識には、上の事例5や6が示すように、「自分たちの生活は変化してしまった」、具体的には、「カスタムに従った生活」とは異なるものになってしまったという、一種の困惑をとまなう自己認識を読み取ることができる。現在この集団区分がもつ意義の一つは、それが「アシ」の人々にとって、そのような歴史的・社会的変化との関わりにおける自己認識を語り、表現する形式となっている点にあると言える。

「アシ」の人々におけるそのような認識を日常的な経験の水準で示す事例として、ここで再び、現地においても従来の文献においても「アシ／トロ」の主要な関わり場とみなされてきた市場に立ち返ってみたい。ここで注目したいのは、「アシ」の人々にとって市場が、その日常性にもかかわらず、「トロ」の人々との遭遇の場であるがゆえに、つねに一定の緊張を感じさせる空間となっているという点である。このことは、たとえば次のようなエピソードに示されている。

事例7 2008年11月のある日、筆者は、T村の南方数キロの「トロ」にある市場に、同村の若者たちと連れ立って出かけた。この市場は、T地域の人々が日常的に行くには遠く、また先方の人々も、T村の市場にはほとんど来ない。市場に

いる時、若者の一人が、買ったばかりのピンロウジュの実を噛もうとして、近くにいた老人から、小さなヒョウタンに入った石灰粉 (*fena*) を借りた。若者は、ヒョウタンに差し込まれていた細い木の棒を一度唾液で濡らし、再びそれをヒョウタンに差し込んで石灰粉を付けてからなめていた。ヒョウタンを老人に返す際、若者は、棒に付いた赤い唾液と石灰粉を自分の手の甲でぬぐい、棒をきれいにしてから返した。そして、筆者の方を向いてこう言った。「T村では、こういうカスタムをもう誰も気にしなくなっているけれど、ブッシュでは今でも尊重しないとイケないんだ。」

この若者の語りが示唆するように、「アシ」の人々にとって市場は、自分たちとは異なる、「カスタムに従った生活」を維持している、あるいはより正確には、維持しているかもしれない「トロ」の人々との遭遇の場である。「トロ」の個人はことによると、たとえば男性が女性の脚に触れるといったキリスト教受容以前の禁忌への違反や、借りた石灰粉の容器を唾液で汚れたままで返すといった非礼に対して腹を立て、「カスタム」を忘れた「アシ」の個人に対し、貝貨や豚といった「賠償 (*faa-abua*)」を要求してくるかもしれない——それが「アシ」の人々の側における想定である。上の事例の場合、こうした緊張は、出かけて行った市場自体が遠方の「トロ」に位置するという事情によって増幅されている。他方、T村の市場においてさえそうした恐れが排除できないことは、T地域の若い女性たちが、ズボン (ハーフ・パンツ) をはいている場合、市場の敷地に入る直前で必ず、持参した大きな布を腰に巻いてそれを隠すという日常的な光景によく示されている。キリスト教の一般的な受容以前、男女の象徴的・空間的分離が重要な意味をもっていたマライタ島北部では、男性の衣服であるズボンを女性が身に着けることは禁じられていた。キリスト教徒となり、自らはもはやそうした禁忌には従っていないT地域の若い女性たちは、市場に行く際には、「カスタム」を守り続ける「トロ」という、そこで遭遇するかもしれない異質な他者とのトラブルを恐れて、ズボンを布で隠すのである。

事例7の若者の語りは、「カスタム」が維持されている空間としての「トロ」と、それが失われてしまっている「アシ」という、今日のステレオタイプを再現するものとなっていた。しかし実際には、「トロ」の人々も現在ではほぼ例外なくキリスト教徒となっており、市場における些細な非礼が「カスタム」への違反としてトラブルを招くという想定は、必ずしも現実的とは思われない。そうだとすれば、以上のような語りや態度が示唆しているのは、「トロ」の人々が実際に「カスタム」を維持しているという事実であるよりは、市場において、自分たちとは多分に異なる

規範や生活様式に従う人々と出会うかもしれないという、「アシ」の人々における意識であると言えるだろう。そしてそのような意識には、その前提として、「自分たちの生活は、カスタムとは異なるものに変化してしまっている」という「アシ」の自己認識を読み取ることができる。「アシ」の人々にとって、「アシ／トロ」の遭遇の場としての市場はそのように、自分たちの生活様式が、一連の歴史的・社会的変化を経て現状——しかも、必ずしも望ましくない現状——に至っているという自己認識を、ごく日常的で具体的なかたちで再生産するような空間として体験されているのである。

8. 終わりに

以上の例が示すように、現在のマライタ島北部、とくに「アシ」の人々において、「アシ／トロ」という集団区分は、歴史的・社会的変化の体験やそれについての認識と深く結び付いている。そうであるとすれば、同地域において「アシ／トロ」区分は、さまざまな変化にも関わらず維持されている伝統的な形式であるというより、それが、自らが経てきた諸変化について人々が認識し語る主要な形式となっているがゆえに、日々再生産されているのだとすることができるだろう。これが、マライタ島北部における「アシ／トロ」区分の現状という問題に対して本稿が提示する見解である。

【謝辞】

本稿は、トヨタ財団研究助成ならびに科学研究費補助金（特別研究員奨励費、研究活動スタート支援）の研究成果の一部である。

【参考文献】

秋道智彌

1976 「漁撈活動と魚の生態——ソロモン諸島マライタ島の事例」『季刊人類学』7(2): 76-131.

Hogbin, H. Ian

1970[1939] *Experiments in Civilization: The Effects of European Culture on a Native Community of the Solomon Islands*. New York: Schocken Books.

Ivens, Walter G.

1978[1930] *The Island Builders of the Pacific*. New York: AMS Press.

Maranda, Pierre and Elli Kōngäs Maranda

1970 La Crâne et l'Utérus: Deux Théorèmes Nord-Malaitans. In J. Pouillon and P. Maranda (eds.) *Échanges et Communications: Mélanges Offerts à Claude Lévi-Strauss à l'Occasion de Son 60ème Anniversaire*, pp. 829-861. Paris: Mouton.

宮内泰介

2011 『開発と生活戦略の民族誌——ソロモン諸島アノケロ村の自然・移住・紛争』新曜社.

Ross, Harold M.

1978 Baegu Markets, Areal Integration, and Economic-Efficiency in Malaita, Solomon-Islands. *Ethnology* 17(2): 119-138.

里見龍樹

2017 『「海に住まうこと」の民族誌——ソロモン諸島マライタ島北部における社会的動態と自然環境』風響社.

Statistics Office

c2001 *Report on 1999 Population and Housing Census: Basic Tables and Census Description*. Honiara: Statistics Office.

2011 *Statistical Bulletin 06/2011. Report on 2009 Population And Housing Census: Basic Tables and Census Description*. Honiara: Statistics Office.